

日露戦争の軍人たち 広瀬武夫と秋山好古

平成13年11月10日・高根台公民館

きょうは日露戦争の二人の軍人。一人は旅順口の閉塞作戦で戦死して、軍神と
うたわれた海軍の広瀬武夫中佐、もう一人はこの習志野の騎兵旅団を率いて、世
界最強のロシアのコサック騎兵を破った秋山好古陸軍少将。この二人を中心に、
当時の軍人がどんな軍人だったのか、またどんな物の考え方をしていたのか、昭
和の時代と比べながら話してみたいと思います。

日露戦争というのは苦戦の連続、まさに九死に一生の戦いでした。完璧な勝利
と云えるのは、日本海海戦くらいのもので、後は後に陸軍記念日になった奉天の
戦いにしても、どっちが勝ったかわからないうちに、相手の方が退却していつて
くれました。ただ日本の陸軍も海軍も、当時としては最高水準の兵器で戦ったの
です。例えば連合艦隊の戦艦三笠や朝日は、大砲にしる設備にしる、世界でも最
優秀の軍艦でした。だからこそ、超大国ロシアを相手にして、どうにか勝つこと
が出来たのです。ここが太平洋戦争と違うところです。太平洋戦争は「太平洋戦
争を日露戦争で戦った」と云われるくらい、四十六号砲の巨砲を搭載した戦艦大
和とか、ゼロ戦、ゼロ・ファイターと恐れられた海軍の零式艦上戦闘機とか、部
分的には大変優れたものがありながら、トータルで見ると極めて旧式な、日露戦
争当時のままの兵器で戦ったのが太平洋戦争でした。

昭和十八年に私が中学に入った時、軍事教練で使っていたのが三八式歩兵銃で
す。明治三十八年採用の銃で、銃身が長くて大変重たい、中学生の肩にはズシリ
と重さがこたえる銃でした。そして何よりびっくりしたのは、昭和十二年に支那
事変が始まった時、この三八式歩兵銃が日本陸軍の主要兵器だったことです。日
露戦争で使ったのは明治三十年採用の三十年式歩兵銃でしたが、カバーがないた
めほこりが入りやすい。そこで戦争が終わると、ほこり除けのカバーをつけて三
八式歩兵銃としたのですが、当時としては射撃の精度も高く優秀な銃でした。し
かし太平洋戦争まで何と三十年以上も、同じ鉄砲を使い続けていたのですから、
常識で考えたって大変な遅れです。

ドイツは第一次世界大戦中の大正七年には、歩兵が一人で持って撃てるサブ・
マシンガンを開発していますし、アメリカも翌年、トンプソンという短機関銃を
作っています。これが戦争が終わっていらなくなり、禁酒法時代のギャングが大
量に流れて、派手に撃ちまくるハリウッド映画お馴染みの場面となるのですが、
アメリカではギャングでさえ、一分間に五百発撃てるマシンガンを持っているの

に、日本の軍隊は一発ずつ狙って撃つ。とても勝負になりません。鉄砲の口径を大きくし、銃身を十センチ短くして、軽くなった九九式歩兵銃が登場するのは昭和十四年のことです。皇紀二千五百九十九年に採用されたので九九式と云うのですが、これとても自動小銃ではありません。「自動小銃にしたらどうか」と云った意見もあったのですが、工業力が貧弱な悲しさ。自動式にして弾丸の無駄遣いをするよりは、よく訓練して一発必中の方がよい。こんな精神論で見送られてしまったんだそうです。しかも九九式の生産が追い付かず、敗戦までとうとう全軍にいきわたらなかつたと云うのですから、お粗末の限りでした。

日本の敗色が濃くなった昭和十九年二月、時の首相東条英機は国民の奮起を求める演説をしました。毎日新聞はこの東条演説の記事に続けて「勝利か滅亡か、戦局はここまで来た」「竹槍では間に合わぬ、飛行機だ、海洋航空機だ」。こんな強烈な見出しの特集記事を掲載したのです。海軍省担当キャップの新名丈夫記者が、「厳しい戦争の真相を国民に訴えなければ、この戦いは負ける」と、止むに止まれぬ思いで、筆をとった記事でした。あの時代、よくもこれだけのことが書けたものだと思いますが、各社の陸海軍キャップは検閲フリー・パスの慣行があり、それで事前検閲にひっかからなかつたんだそうです。「敵が飛行機で攻めてくるのに、竹槍では戦えない」。まあ誰が考えたつて、当然至極のことを書いたのですが、東条首相は激怒しました。この記事は国民を悲観させ、戦意を喪失させる。大本営発表にも疑いを持たせる。竹槍でも戦うのは陸軍の基本方針だ。だから、竹槍で勝てないというのは敗戦思想であり、陸軍の作戦をバカにしたと云うのです。

東条は毎日新聞の廃刊を迫りましたが、情報局にも骨のある人はいました。村田五郎という情報局長は、「あのくらの記事を書いた程度で廃刊にすれば、世間の物議をかもし、ひいては外国からも笑われる」。こう云って怒り狂う東条をなだめ、発禁処分と責任者処罰で納得させたのです。編集局長は責任をとって辞職しましたが、新名記者が進退伺いを出すと、それを突き返して局長賞を贈ったそうです。編集局長賞というのは、新聞記者にとっては最高の名誉ですが、それだけでは終わりませんでした。新名は八日後、東条の命令で三十七歳の二等兵として四国の丸亀連隊に懲罰召集されたのです。強度の近眼で兵役免除になっていた新名記者です。高松の連隊区司令部でも、こんな兵隊をとつても役に立たないと思つたのでしよう。即日、召集を取り消したんですが、東条と云う人は、こういうことにはしつこいのです。師団司令部に「絶対帰すな」という厳命がきて、新名はたった一人で入営しました。海軍が「こんな老兵を一人だけ、名指しで召集するのはおかしい」と抗議すると、陸軍は大急ぎで同年代の二百五十人を召集したのです。

丸亀連隊にも、骨のある人はいたようです。他の兵隊と一緒に新名を三か月で

除隊にしていまいました。その際担当将校は、新名に云ったそうです。「中央の命令で君をとった。沖繩か硫黄島に送れということだった。いずれ再召集がくるから、内地にいない方がいい」。この忠告で、海軍が報道班員としてフィリピンに送ってくれたので新名は命拾いしましたが、辻褃あわせにとられた二百五十人は再召集され、全員硫黄島に送られて玉碎したそうです。敗戦後にそのことを知った新名は、「何とも遣り切れない、たまらない気持ちだった」と云っています。東海大学の総長をされた松前重義さんも通信院の局長時代、この戦争は早く終わらせないとダメだと、東条内閣の倒閣運動をやつてにらまれ、四十三歳の二等兵で召集されました。技術のエキスパートにさせたのが穴掘りだったというのですから、何ともひどい話です。

その点アメリカは違います。戦時動員をする時、本人の経歴、専門、さらには能力から配置を考え、それにふさわしい待遇をしています。映画監督のジョン・フォードは海軍中佐。ミッドウエー海戦ではドキュメンタリー映画のメガホンをとっていますし、パイロットの経歴を持つ映画俳優のジェームズ・スチュワートは空軍大佐です。日本の場合は、仕事や能力に関係なく召集し、戦地で軍医が足りなくて困っていると云うのに、お医者さんを兵隊に使ったりした話はザラでした。大本営発表にしても、そうですね。アメリカやイギリスが常に損害を率直に発表して、国民の奮起を促したのに対し、日本の大本営は味方の損害は極力少なめにし、戦果を誇大に発表するようになっていったのです。どうもこの「隠す、ごまかす」といった体質は、未だにちっとも変わっていない感じがしますが、太平洋戦争の時代は実にバカバカしい、無駄なことにエネルギーを使っていた時代でもありました。家庭の主婦を動員して竹槍訓練をさせたり、敵の言葉は一切ダメだということで、野球用語をわざわざ日本語に変えたりしています。ストライクを「ヨシ一本」、三振を「ソレマデ」と云ったと云うのですから、何とも情けなくなります。

さてその東条は、B29の空襲が激しくなり、戦局がますます悪化した昭和二十年二月、重臣の一人として天皇に意見を求められました。東条が何と答えたのかと云うと、「現在の戦況は全体的に成功不成功相半ばすと見る。敵の本土空襲も近代戦の観点からすれば序の口だ。正義の上に立つ戦いなりと、皇国不滅の精神に立つならば悲観に及ばない」。そして「あらゆる施策を尽くして、戦争を完遂すべきだ」と上奏したのです。飛行機がないどころか、物資もなければ食糧もない。制空権もなければ制海権もない。ないない尽くして敗戦必至だと云うのに、一体どこから五分五分の見通しが出てくるのでしょうか。何の裏付けもないのですから、「皇国不滅の精神に立つならば」などと、空疎な文字を並べ立てて作文するしかなかったわけです。

日露戦争が始まった時の参謀次長児玉源太郎は、アメリカの世論工作に渡米す

る貴族院議員金子堅太郎に、こう云っています。「開戦と同時にロシア軍の三倍の兵力を投入する。今のところ五分五分を、何とか六分四分に持つていけないかと苦勞している」。言葉は同じ五分五分でも、東条のは厳しい現実に目をつぶつた、願望だけの五分五分。児玉はお互いの力を知っているからこそ、まず三倍の兵力を投入して、少しでも有利な態勢を築こうとしたのです。満州軍総参謀長として全陸軍の作戦指揮をとつた児玉は、三十八年三月、奉天の戦いでロシア軍を破ると、表向きは戦況報告の名目で秘かに上京しました。新橋駅まで出迎えた参謀次長の長岡外史少将を、いきなり怒鳴りつけたそうです。「何をばやばやしている。火を点けたら、消すことが肝心なのを知らんか」と。そして児玉は、元老や政府首脳に満州軍の戦鬪力が限界にきていることを訴え、「早く戦争を終わらせなければダメだ」と、シリを叩いて回つたのです。

大山巖は満州軍総司令官として出征する際、海軍大臣の山本権兵衛を訪ねています。薩摩出身の大山が同じ薩摩の後輩山本に頼んだことは、この戦争の軍配の揚げ時でした。「この戦いの勝負は、どこまでいつたらつくものか。ロシアという大国相手では、いつどの辺りで終局させるか、はなはだ心許ない。軍隊はただ進んでさえいれば良からうが、国家はそうはいかない。時と場合を見極めて、終わらせる。その軍配を揚げる大役が勤まるのは、おはんを措いてない」と頼んだのです。

元老も軍首脳部も、国力のない日本がいつまでも戦っていたら、必ず負けることをよく知っていました。だからこそ元老の伊藤博文は、金子堅太郎をアメリカに派遣し、金子とハーバード同窓のルーズベルト大統領に講和斡旋に動いてもらおうと、開戦と同時に戦争終結の布石を打っていたのです。児玉もまた、奉天の戦いの勝利が戦争終結のチャンスだと見たのです。しっかりと現実認識。これが明治の軍人たちに共通する、何よりも優れた点でした。そして児玉といふ大山といふ、実に見事な大局観を持っていたと思います。

大山という人は大兵肥満、寡黙で寛大。茫洋といつた形容詞がぴったりで、部下に何でも任せて責任だけは取る。軍司令官の理想像と見られ勝ちですが、実際の大山は細心で、むしろうるさ型だったそうです。総参謀長が有能な児玉源太郎だったからこそ、ポイントだけ押さえて後は全て任せました。児玉は児玉で、大山のことをそのひき蛙みたいな風貌から、「ガマ坊、ガマ坊」と云いながら、かなり細かいことまでキチンキチンと報告していたと云います。戦略と同時に政略も常に頭に入れている。まさに呼吸もピッタリあつた絶妙なコンビでした。能力のない軍司令官が、この大山を真似て何でも参謀任せにし、スタッフに過ぎない参謀が大きな権力を持つ。そして徳望も知謀もない参謀が、独断専行で勝手気ままに日本を引っ張つていった。これが満州事変から太平洋戦争にかけての、日本の陸軍だったように思います。

ところで「軍神」、軍の神様という言葉は、それまで歌や物語の世界で使われることがあっても、戦争で使われたのは日露戦争が初めてなのです。第一号は、旅順口の閉塞作戦で戦死した広瀬武夫中佐です。陸軍もやがて遼陽の戦いで戦死した橋周太少佐、この人は東宮武官、後に大正天皇となる皇太子のお付き武官をした人ですが、橘少佐を軍神として中佐に進級させます。軍神は支那事変で西住戦車隊長、太平洋戦争になるとハワイ真珠湾攻撃をした特殊潜航艇の九軍神、ベトナム上空で戦死した加藤隼戦闘機隊長と続きますが、国民の戦意高揚を狙った軍神ですから、軍が選ぶのも将校、エリート中心でした。

ところが明治二十七、八年の日清戦争のころには、まだ軍神という言葉はありません。もっぱら軍国美談が中心で、軍の発表というよりは、新聞記事で紹介され、錦絵に描かれ、歌に歌われて広まっていったのです。死んでもラツパを放さなかつた木口小平であり、平壤玄武門の一番乗りをした原田重吉でした。そして重傷を負つた軍艦松島の水兵が、苦しい息の下から清国の戦艦である「定遠はまだ沈みませんか」と尋ね、「仇を討ってください」と絶命した話でした。佐世保に帰ってきた松島の副長が、行きつけの本屋でこの話をしたところ、時事新報の通信員をしていた本屋の主人が、「これはいい話だ」と飛び付いて記事にしたのです。この記事に感動したのが、当時二十三歳の新進歌人佐々木信綱です。こうして「煙も見えず雲もなく」で始まり「まだ沈まずや定遠は」と続く、軍歌「勇敢なる水兵」となるのですが、三浦虎次郎という十八歳の少年水兵だったそうです。

明治維新は日本に初めて、四民平等の新しい国家を生みました。チヨン鬚を切つて二十年余り、徴兵制度、国民皆兵になつて初めての外国との戦争が日清戦争でした。それまでの戦争は侍世界の話であり、庶民にとって迷惑ではあつても、自分たちの生き死には直接関係ありませんでした。それが初めて誰もが銃をとつて戦う、自分たちの戦争になつたのです。意気込みは強いが、不安も大きかつたのです。それだけに日清戦争勝利の知らせに、国民は沸きました。生方敏郎という人が書いた「明治大正見聞史」を読みますと、まさに有頂天という言葉びつたりの喜びようです。勝利の知らせは、電信線のきている警察署に真つ先に入ってきました。警察ではそれを一々掲示板に書き出したのですが、生方は母親に言い付けられ、一日に何度も何度も見にいったそうです。そしてその都度、大人も子供も大声で万歳を叫び、老人は涙を流したのです。日清戦争のヒーローは、ふだん市民生活をしている商人や農民たちの戦いぶりでした。ですから新聞や錦絵の主人公も、将校ではなく、身近にいる兵士だったのです。

それでは日露戦争の軍神広瀬武夫中佐は、一体どんな背景から生まれたのでしょうか。満州で日本の陸軍が戦うには、まず弾薬や物資の補給路を確保することが必要でした。それには旅順のロシア艦隊を撃破して、一刻も早く海上輸送を安全にしなければなりません。そこで日本の駆逐艦隊は、国交断絶をするとすぐ旅

順口を夜襲したのですが、ロシア艦隊は湾の奥深く閉じこもったまま、要塞に守られて出てきません。旅順口の湾の入り口は幅が二百七十呎。軍艦の通れるところというところ、たった九十呎です。敵が出てこないのなら、入り口にボロ船を沈めて、軍艦が出入り出来ないようにしてしまおうと、閉塞作戦が始まったのです。

連合艦隊司令長官の東郷平八郎はこの作戦が提案された時、危険が多すぎる云って簡単には首を振りませんでした。夜間の作戦とすること、乗組員の収容に水雷艇を必ず一隻ずつつけること。人命尊重の手を打った上で、やっと許可したのです。それでも砲台に囲まれた狭い湾に突入し、船を沈めた後はボートを漕いで帰ってくるのですから、決死隊であることに変わりはありません。下士官や水兵は志願制でしたが、七十人の募集に二千人を超す志願者が集まり、一人っ子や長男を外すなど、家庭の事情を考慮して選抜したと云います。

広瀬武夫の戦死は三月二十七日、第二次閉塞作戦で福井丸を指揮した時です。沈める予定地点に近付いた時、敵の水雷が当たり福井丸は沈み始めました。脱出するため広瀬が点呼をとると、杉野孫七兵曹長の姿が見えません。広瀬は全員をボートに待機させたまま、三度船内を探して回りましたが見当たりません。足元まで浸水して来たので、広瀬もボートに乗り移り、沈めるための爆薬のスイツチを押して漕ぎ始めた時です。飛んできた一発の砲弾が広瀬の頭に当たり、広瀬の体はわずかな肉片を残しただけで、一瞬のうちに海に消えたといわれています。

海軍大臣の山本権兵衛は、折りから開会中の帝国議会で特に発言を求め、東郷司令長官の公電を読み上げました。電報は「その最期頗る壮烈にして」と広瀬の戦死の模様を詳細に報告し、「万世不滅の好鑑、良いお手本のことですが、好鑑を残せるものというべし」と結んでいます。新聞各社は号外を発行、自分の危険を顧みず、部下の安否を確かめて犠牲になった広瀬中佐の行動が、国民の大きな感動を誘ったのです。欧米の新聞も、キリスト的献身に通ずるとして広瀬の戦死を大きく取り上げましたし、ドイツでは広瀬の肖像を入れた絵はがきまで売り出されたそうです。

実は山本権兵衛にとって、広瀬は特別印象に残る海軍士官でした。七年前の明治三十年の正月、当時海軍少将で軍務局長だった山本の家に、広瀬武夫と名乗る海軍大尉が訪ねてきました。山本が用件を聞くと、山本の長女で十八歳になる稲子と、広瀬の同期生財部彪大尉との縁談を破談にしてほしいと云うのです。財部は宮崎県都城の出身。海軍兵学校を首席で卒業し、常備艦隊参謀として将来を嘱望されている海軍士官でした。山本が「娘に何か不足があるのか」と聞くと、「お嬢さんに問題はないが、閣下の問題がある」と云います。山本権兵衛といえ、日清戦争の前に一介の大佐という身分でありながら、年をとった幹部九十七人の首切りをやったのけ、戦後はロシアとの戦いに備えて戦艦六隻、一等巡洋艦六隻のいわゆる「六六艦隊」を推進している、海軍切っ手の実力者です。

広瀬はこう云うのです。財部は放っておいても偉くなる男だ。それが山本の娘婿になれば、実力で昇進しても「親の七光りだ」と陰口をきかれる。それは同期生として心外だし、財部も可哀相だ。この際スツパリ破談にしてももらえないかと云うのです。周りの目を気にして悩んでいるクラスメートのためとはいえ、男気を出してこんなことを云いに来た広瀬という男に、山本はびつくりしました。山本は「オレは依怙贖贖なんかせん。世間の噂なんぞ気にかけてはいかん。しかしお前の気持ちもよくわかるから、財部の気持ちもよく聞いた上、しかるべく取り計ろう」。こう云って広瀬を帰したのですが、結局財部は山本の娘婿となり、海軍のプリンスとして出世街道を歩むことになります。

その年の六月、三十年の六月ですが、財部がイギリス、二期下で広瀬の親友秋山眞之、やがて連合艦隊参謀として日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を破る秋山がアメリカ、そして広瀬も選ばれてロシアに留学しました。留学生選考の書類が山本に回ってきた時、何かの間違いじゃないかと、人事当局に問い合わせたそうです。と云いますのも、財部も秋山も海兵卒業成績が一番、他のドイツやフランス留学組も二番か三番と選り抜きの俊秀ばかりなのに、広瀬だけは八十人中六十四番。おシリから数えた方が早いのです。当時の世界の海軍ではイギリスが一番、アメリカも新興海軍国として注目されていましたから、日本の海軍士官もみんな英語中心、ロシア語を勉強する者は余りいません。そんな中で早くからロシア語に取り組んでいた熱意が買われ、異例の抜擢となったのです。山本が議会で特に発言を求めた背景には、「あの男が……。これからという時に惜しい男を」という、特別な感慨があったのではないでしょうか。

財部など海兵同期生の間で、広瀬のことを将来に伝えたい。銅像を建てようとする義援金募集の話が持ち上がった時、この計画に賛同したのが東京日日新聞です。現在の毎日新聞ですが、社告で「皆称して軍神という。けだし天の命名なり」。こう書いたことが、軍神広瀬中佐の誕生につながりました。三千二百円余りのお金が集まり、神田須田町・万世橋のたもとに、広瀬中佐と杉野兵曹長の銅像が建てられました。昭和二十一年十一月、進駐軍の命令で壊されるまで、東京の観光名所として親しまれたのは、皆さんご存じの通りです。

東京大学で比較文学を教えていた、島田謹二さんという方がいます。八年前九十二歳の高齢で亡くなりましたが、平成二年に「ロシア戦争前夜の秋山眞之」という本を出された時、私はびつくりもし、感動もしました。バルチック艦隊との戦いに精根を傾ける秋山眞之を描いたこの二千多の大作は、島田さん八十九歳の作品です。全く年令を感じさせないみずみずしい筆で、私がこうした講座を始めたのも、一つは「まだまだやることは一杯ある」と、島田さんに勇気を与えられたからです。文字通りライフワークとして秋山眞之に取り組まれた方ですが、実は秋山の親友広瀬武夫との出会いが、島田さんの秋山研究のスタートになって

いたのです。

昭和三十四年の秋、島田さんは東大図書館の書庫で、「広瀬武夫蔵書」と赤い印の捺された一冊の本を見つけました。広瀬武夫といえは軍神、あの銅像の主人公だが、その人がこんな本を持っていたのかと、島田さんは何か得体の知れない感動を覚えたと言います。武勇一途の軍人と思っていたのが、書物を愛する学問の人だったのか。それも蔵書印を捺すほどたくさん本を持っていたとなると、外国の事情にも詳しい文化的エリートだったのかも知れない。この明治の軍人の正体を突き止めたといと、島田さんが調べていくうちに、魅力に溢れた広瀬武夫の間像が明らかになっていったのです。島田さんが「ロシアにおける広瀬武夫」という、大変優れた本を出版されたのは、昭和三十六年夏のことでした。

広瀬は大分県竹田市、岡藩の貧乏士族の次男として生まれました。裁判官をしていた父親の転勤先、飛騨高山で小学校の代用教員をしていたのですが、東京に出て勉強したいと、学費のからない海軍兵学校に入りました。すでに海軍士官になっていた、七つ年上の兄勝比古の影響もあつたと思います。ロシアに留学した広瀬は、足かけ五年ペテルブルクで暮らしますが、広瀬ほどロシア語の本をよく読み、ロシア国内をよく旅行して、ロシアの勉強をした日本人はいなかったと云います。当時プーシキン、ツルゲーネフ、トルストイといったロシアの文学書を、原書で読むことが出来た数少ない一人だったようです。広瀬の死後、東京外国語大学や東大図書館に二百冊近くの本が寄贈され、そのうちの一冊が島田さんの目に止まったわけですが、広瀬の肉人的な幅を物語るように、軍事関係の本だけではなく、文学書からオペラの台本、演劇関係の本や鉄道地図、旅行案内まであつたそうです。

広瀬は身長一七七五、当時としてはかなりの長身です。お手元の資料の写真はペテルブルク時代の広瀬ですが、角張った顔つきながら、凛凛しく清々しい目が印象的です。柔道は講道館四段。酒、たばこをのまず、ダンスも余り上手でない。一見武骨な感じがしますが、この人ほど誰からも愛され、信頼され、しかも若い女性に持てた日本の海軍士官はいなかったそうです。島田さんは、ロシア時代の広瀬を知る川上常盤という女性に会って話を聞いています。函館のミッシェン・スクールを卒業して、ウラジオストクの貿易事務官、今という領事をしていた川上俊彦という人と結婚し、広瀬がシベリア経由で帰国する時、十日間ほど泊めているいと世話をした人です。

川上常盤は「広瀬と一緒にいると、その大らかな暖かな人柄で、まるで春風の中にいるような、何ともいえず明るい気持ちになった」と云っています。ウラジオ市内を案内していると、突然土砂降りの雨になって道路はぬかるみの海。広瀬はウラジオで買ったばかりのズボンや靴が泥まみれになるのも構わず、ジャブジャブと泥の中に入って行って、馬車を停めるとサツと常盤の手を取り、馬車に乗

せてくれます。それがちつとも嫌味がなくて、自然なんだそうです。トルストイの「戦争と平和」が話題になった時です。広瀬は「万一戦争になったら、日本の将校だから日本のために戦うのは当然だが、ロシアは僕の第二の故郷です。ロシアにも報いるような道を見つけない。それが人道というものでしょう」と云うのです。川上常盤はその人道という言葉に不思議な感動を覚え、島田さんが会った時五十年以上も経っているのに、その時の広瀬がハッキリ印象に残っていると云ったそうです。日露開戦が決まった時、海軍大臣の山本権兵衛は「人道を逸するな、光輝ある文明の代表者として恥ずかしくない行動をとれ」。こういう大臣訓示を各艦隊司令官に打電させましたが、山本といい広瀬といい、当時の軍人の生き方、考え方にはこの「人道」という、しつかりしたシンが一本通っていたように思います。

広瀬の豊かな文才を伝える、こんな話があります。当時ロシア公使館付武官をしていた八代六郎中佐。この人は後に海軍大将、海軍大臣になり、大変広瀬を可愛がった人ですが、道を歩いていて突然「万里長城不禦胡」と漢詩を朗読し、「三十歩歩く間に十七文字に作ってみろ」と云います。すると広瀬は五、六歩歩き出したかと思うと、「盗人を吾が子と知らで垣つくり」と高々と歌い上げたと云うのです。胡というのは、中国北方を荒らした騎馬民族匈奴のことです。天下を統一した秦の始皇帝は、胡を防ぐために万里長城を築きましたが、秦は愚かな二世皇帝胡亥のため、あつという間に滅んでしまいました。胡に胡亥をひっかけ、国を盗んで滅ぼすのがわが子の胡とは知らずに、一生懸命胡を防ぐ垣根を作った。こんな意味だと思おうのですが、広瀬が文才と共に大変な教養人だったことがわかります。

ペテルブルクで広瀬は、大学教授のペテルセン一家、海軍少将で子爵のコヴァレフスキー一家と、家族同様の付き合いをしています。広瀬という人は、何かあれば手紙を書き、何もなくても手紙を書くといった具合に、三十六歳の短い生涯で二千通を超す手紙を残した人です。その中に、同じ大分県出身の作曲家滝廉太郎のことを書いた手紙があります。滝廉太郎はお父さんが竹田の郡長をした関係で、二年ほど竹田で暮らしたことがあり、有名な「荒城の月」は、竹田の荒れ果てた岡城をイメージして作曲したと云われます。広瀬は滝廉太郎から送ってきた「荒城の月」の楽譜を、ペテルセンの令嬢マリアに弾いてもらったのですが、「誰の曲か、素晴らしい曲だ」とびっくりりされた話を、東京の兄嫁に書き送っています。半ば同郷の滝の作曲を自慢し、半ば日本人の作曲だといっても、なかなか信じて貰えなかったことを悔しがっています。マリアは広瀬の幼い姪のために千六百枚ものロシアの珍しい切手を集めてくれた女性ですが、秘かに広瀬に好意を寄せていたようです。広瀬の戦死を知ると、日本との戦争中なのに、「広瀬はいつまでも、私たちの心に生き続けるでしょう」と、丁重な悔やみの手紙をドイ

ツ經由で、広瀬の兄嫁に送っています。

戦争がなければ、あるいは広瀬が結婚を考えたかも知れない女性が、コヴァレフスキー少将の令嬢アリアズナだったようです。帰国命令が出た時、広瀬はアリアズナから「記念に何か書き残してほしい」と手帳を出され、彼女の好きなプーシキンの「夜」という詩を漢詩に訳しています。お手元の資料に、島田さんの本に載っていた全文を書いておきましたが、三行目の「君を思いて心まさに熱し、嗚咽独り声をのむ」。これが広瀬の正直な気持ちだったのではないのでしょうか。広瀬は「戈握る手に筆とりて外国のみやびの道を大和言の葉」など、五首の歌も書いていますが、広瀬の豊かな教養が異国の少女の心を捕えたのだと思います。

広瀬は第一次閉塞作戦で、報国丸という商船を指揮しています。旅順のロシア語新聞は、沈められた報国丸のデッキに「尊敬するロシア海軍の軍人諸君。自分は日本の海軍少佐広瀬武夫である。報国丸でここに来た」。こうロシア語で書かれた字幕が張ってあったと伝えています。旅順には親しくしていたロシア海軍の軍人が大勢来ていましたから、彼らへのメッセージであると同時に、何よりもアリアズナに自分の消息を伝えたかったのではないのでしょうか。

ところで、広瀬のことが戦前の修身の教科書に載っていたのを、ご記憶の方もいらつしやると思います。軍神のことではなくて、広瀬が少年との約束を守ったという話です。広瀬はロシアに留学するとき、友人の子供からロシアの切手をお土産にねだられ、二つ返事で承諾しました。広瀬の帰りは厳しい冬のシベリア經由でした。ロシアとの戦争に備え、冬のシベリア事情をじかに見てこいというのですが、シベリア鉄道がまだ完成していませんから、イルクーツクからはソリを乗り継いでの強行軍となりました。零下二十度から三十度の猛烈な寒さの中、十昼夜かけて二千キロ余りの雪と氷の原野を踏破したのですが、いつ猛吹雪で立往生するかわかりません。もし自分に万一のことがあれば、切手を心待ちにしているあの少年が、どんなにかがっかりするだろう。広瀬はイルクーツクから兄勝比古に手紙を出し、集めた切手を同封して少年に渡してほしいと頼んだのです。

実際は広瀬の方が切手よりも早く、無事に日本に帰ってきたのですが、二十年ほど前に切手マニアの間で、「この貴重な切手を持っている、幸運な少年は誰だろう」と、話題になったのだそうです。当時小田原女子短期大学の学長をしていた関重広という人が、文芸春秋の巻頭随筆に「それは私です」と名乗りを挙げていますが、少年相手の小さな約束を守ったという、誠実で心の優しい広瀬を伝えるいい話です。昔の修身の教科書には、余り押しつけがましくなく、それでいてしみじみと心に残る話が、いくつか載っていたような気が致します。

約束を守ったといえは、杉野孫七兵曹長は三人の子供の将来について、奥さんに書き置きを残しています。子供を学校にやっつけてほしいこと、一人は高等小学校を出たら広瀬に預け、海軍軍人に仕立ててもらおうよう頼んでいます。独身の広瀬

が、それだけ部下から信頼されていたわけですが、杉野の長男修一は父の遺言を守って海軍軍人になりました。阿川弘之さんの書いた「軍艦長門の生涯」を読みますと、終戦直前海軍大佐。旅順の海軍予備学生教育隊長を務めています。大變評判のいい、優しい隊長だったそうです。戦争が終わると、海軍の象徴だった戦艦長門の第三十二代、最後の艦長に就任しています。旅順の勇士の遺児が、海軍の幕引き役を務めたというのも、何かの因縁かも知れません。そして軍神広瀬中佐の銅像がなくなっても、その話が私たちの心に残っているという事は、広瀬がただ単に国のために死んだということだけではなく、部下の安否を気遣って死んだ、心の優しい軍人だったからではないでしょうか。

X

X

明治の日本が面白いのは、この習志野の騎兵第一旅団を率いて、世界で最強といわれたロシアのコサック騎兵を破った秋山好古にしても、その弟で連合艦隊参謀としてバルチック艦隊を破った秋山眞之にしても、最初から軍人になりたくて軍人になったのではないことです。家が貧しくて、学校に入りたくてもお金がない。ただで勉強出来て食べさせてくれる所が、陸軍士官学校であり海軍兵学校だったのです。

明治維新の最中に眞之が生まれました。秋山兄弟の伊予松山藩は徳川の親藩でしたから、賊軍として土佐藩に占領され、戊辰戦争の軍費十五万両を押しつけられたのです。支払いは藩士の俸禄を削って当てることになりましたが、お父さんは十石とりの下級武士です。子供が四人もいるのに、また増えたのではとても食べていけないと、眞之をお寺に預ける話が出たのですが、これを聞いた当時九歳の好古が、「自分がおあしをいっばい稼ぐから、弟を寺へやらないでくれ」と頼んだと云うのです。好古は明教館という藩の学校で漢学を学んだだけでしたが、この九歳の決意を守るため、銭湯の風呂たきをして家計を助け、大阪へ出て小学校の先生になり、士官学校で生徒を募集していると聞いて陸軍将校になります。

騎兵を選んだのは、砲兵や工兵だと卒業まで四年かかるが、騎兵と歩兵は一年早く三年で卒業できます。早く給料を貰えば、弟を松山中学に入れるお金を送れるからです。歩兵にならなかつたのは、お父さんが徒士といって馬に乗れない身分でしたから、背の高かつた好古は馬に乗ってみたかつたのでしよう。好古は常々、「人は生計の道を講ずることにまず思案すべきである。一家を養い得て、初めて郷里と国家に尽くせる」。こう云っていましたが、この現実的な考え方は終生変わらなかつたと云います。

好古は眞之が松山中学四年の時、東京の大学予備門、今でいうと東京大学の予科に入れるため、松山から呼び寄せました。貧乏中尉の給料で大の男を一人養うのですから、まあ貧乏を絵に描いたような生活です。家財道具といったら、炊事道具のほかは酒どつくりと欠けたご飯茶碗が一つあるだけ。好古と云う人は酒が

ご飯代わり。戦場でも水筒にブランデーを詰めて飲んでいたほど、大変酒好きな人でしたが、そのたった一つの茶碗で好古が酒を飲み干すと、真之が待ちかねたようにご飯をかき込む。おかずはタクアンだけです。

好古は戦場の作戦指揮でもふだんの日常生活でも、簡單明瞭、單純明快が信条でした。軍人になって曲がりなりにも一家を養えるようになった今、軍人として国家に尽くす。自分は騎兵だから、敵に勝てる騎兵を作る。そして弟に約束通り学問をさせる。この人生目標以外のことは余計なことであり、考えたり、やったりしない。ですから茶碗も一つあれば、これで十分飲み食い出来るということだったようです。真之がせつかく入った大学予備門を一年で退学して、海軍兵学校に入ったのも、予備門の後大学に三年もかかるとあっては、いつまでも兄に甘えてはいられないといった気持ちからでした。云ってみれば、明治の賊軍子弟の貧しさが、「騎兵の父」といわれた秋山好古、「知謀湧くが如し」とうたわれた秋山眞之を生み、日露戦争を勝利に導いたとも云えるのです。

真之は松山中学以来の親友で、共に文学をやるうと誓い合っていた俳句の正岡子規に、「志を変じ、海軍において身を立てんとす」という詫び状を書いています。大変な裏切りをしたという思いがあつたのでしよう。「海へ出たら再び会うことはないだろう」と、若者らしい感傷に満ちた手紙を出していますが、二人の友情は大変細やかなものでした。明治二十六年、真之が快速巡洋艦吉野の受け取りにイギリスへ行った時、子規は暑いインド洋を航海して帰ってくる真之の身を案じて、「暑い日は思い出せよふじの山」という句を送っています。新しい俳句を目指す活躍が認められ、めきめき売出し中の元氣いっぱいの頃の子規です。そして真之がアメリカへ留学した時、子規は新聞「日本」に「秋山真之の米国行きを送る」と題して、「君を送りて思ふことあり蚊帳に泣く」と云う送別の句を載せています。そこには、誰もが懂れていたアメリカへの親友の旅立ちを喜びながら、自分の方は結核カリエスで歩くこともままならない。そんな子規の気持ちに、「蚊帳に泣く」に伝わってくるような気がします。

好古は色白で目が大きく、鼻がずば抜けて高い。しかも長身ですから、ちよつと日本人離れした感じだったようです。お手元の資料の写真は、下が日露戦争当時の陸軍少将時代。戦地のせいややや痩せた感じなので、上の大将時代の方が外国人に近い感じが出ているかも知れません。ロシアのコサックを破つたというので、戦後大勢の外国武官が日本へ見学に来ました。彼らは、馬も人も貧弱な日本の騎兵が、コサックに勝てるはずがない。西洋人の顧問を雇って、指揮をさせていたに違いないと思つていたようです。ですから、習志野の騎兵学校に行つてみると、校長の秋山好古がいます。「やはり西洋人がいた」とうなづき合い、好古が日本人だといつても、なかなか信じなかつたという話が残っています。

好古は自慢話を一切しない人でした。日露戦争の話が出て、「負けてばかり

いた。ただ、わしは逃げんかった」と云っていたそうです。騎兵同士の最初の戦闘になった時、ロシア軍に大砲があったため、大変な苦戦になりました。小銃弾を撃ち尽くして機関銃の弾を流用する有様で、部下から「一旦退却してはどうか」との意見が出ました。この人は面白いんですね。水筒のブランドーをうまさうに飲んだかと思うと、後は何もいわずにその場に寝転んでしまったのだそうです。

「旅团长閣下が機関銃陣地でふて寝している」。兵隊たちがこんなことをささやき合っているうちに、ロシア軍の方が攻め疲れた形で退却していききました。後で好古は云ったそうです。「退却をいわれた時ほど困ったことはない。戦術的にはそうなんだが、戦略的には最初の戦いで下がるわけにいかない。だから聞こえぬふりをして、寝ていたのだ」。緒戦から退却したのでは負け癖がつくし、士気にも響く。だから逃げるわけにはいかないと、好古は腹をくくったのですが、実は秋山騎兵旅団が当時の最新鋭兵器・機関銃を装備していたことが、どんなロシア軍の猛攻にも引かずに耐える、不敗の騎兵集団を作ることになったのです。

機関銃の歴史は結構古く、手で動かすものは戊辰戦争で長岡藩の家老河井継之助が使っています。これで山県有朋の官軍を大いに苦しめたことは、司馬遼太郎さんの小説「峠」に出てきますが、明治十三年にアメリカのハイラム・マキシムが自動式の機関銃を開発すると、兵器として採用する国が増えてきました。ただ重さが百キもあって、簡単には持ち運び出来ません。馬で引つ張るしかありませんから、名称も機関砲。つまり大砲の一つと考えていたわけで、どう使ったら効果的か、どの国もハッキリ掴んでいませんでした。

これが「防御には最適の兵器」だといち早く見抜いて、騎兵に持たせるよう意見を書いたのが秋山好古です。この戦争が始まる六年も前のことでした。当時の機関銃は一分間に二百五十発発射できますから、一分間に十発撃つ歩兵二十五人に匹敵する。しかも歩兵銃に比べて、発射速度、命中率にはるかに上回りますから、機動力のある騎兵に持たせれば威力も大きいと云うのです。好古の意見が採用になり、日本陸軍がフランスから六十丁の機関銃を買い入れたのは、戦争開始直前、まさに滑り込みセーフだったのです。

コサックというのは、トルコ語で「自由の人」という意味なんだそうです。十五世紀のころ、大地主の圧迫から逃れて、ドン川流域などロシア南部に移住した農民たちが、豊かな馬に恵まれて強力な騎馬集団を作り上げました。彼らはロシア皇帝から土地と自治組織を認めてもらう代わりに、騎兵として皇帝に仕えるようになりました。コサックは国境警備に当たり、シベリア開拓の先兵となったのです。

秋山好古は、あの時代の人としてはスケールの大きな、何かケタ外れの発想力を持つていたように思います。騎兵の戦いにしても、普通なら「騎兵に対抗するには騎兵で」と考えます。好古の頭が柔軟なのは、そうした常識にとらわれなかつたことです。好古は強力なコサックに勝つことより、まずどうしたら負けない

かを考えたのです。コサツクのお家芸は、長槍、長い槍を振りかざしての馬上突撃です。しかも勇猛果敢に、繰り返し繰り返しピストン攻撃をかけてきます。好古の頭には、織田信長の長篠の戦いがひらめいたのではないでしょう。信長は武田の騎馬軍団を破るため柵を張り巡らし、その後ろに鉄砲隊を配置しました。火縄銃の有効射程は百疔です。横一線で撃つたら、次の弾込めの間に馬に蹂躪されてしまいます。そこで信長は三千丁という、当時の常識では考えられないほど大量の銃を買い入れ、しかも三段構えに配置したと云うのです。先頭が撃つと、すでに弾込めしてある二列目に代わる。間断なく撃ち続けることで、最強をうたわれた武田の騎馬軍団を破つたのです。種子島に漂着したポルトガル船が鉄砲を伝えてから三十年余り。鉄砲の集中使用を思いついた信長という人は、やはり天才なんだろうと思います。

好古はコサツクのピストン攻撃をしのぐため、柵の代わりに工兵に塹壕を掘らせ、鉄条網を張った拠点陣地を作りました。敵が攻めて来たら、騎兵は馬では戦わずに、馬から下ろして陣地に入れ、歩兵にしてしまおう。三千丁の火縄銃の代わりに、機関銃を陣地に据えて、隙間なく撃ち続けることで、向かってくるコサツク騎兵を薙ぎ倒したのです。しかも好古の戦略眼が優れていたのは、ただ単に騎兵に機関銃を持たせたのではなく、工兵に陣地を作らせ、砲兵、歩兵を入れて守りに厚みを持たせたことです。いわば騎兵中心の機動部隊を作ったのですが、好古のこの優れたアイデアは、残念ながらその後の日本では忘れられてしまいました。逆にソ連は、戦車を中心とした歩兵、砲兵、工兵協力の機甲兵団を作り上げ、昭和十四年、ノモンハンで日本軍を破ることになります。

好古が勇将として名を馳せるのは、日露戦争最大の危機といわれた黒溝台の戦いです。明治三十八年一月、日露両軍の主力は奉天と遼陽の間を流れる沙河を挟んで対峙していました。資料の配置図を見て下さい。東側の右翼が黒木為楨大將の第一軍、中央が野津道貫大將の第四軍、そして西側の左翼が奥保鞏大將の第二軍です。第二軍に所属する好古の秋山支隊八千人は、さらにその西側、つまり日本軍の最左翼、東西三十^{キロ}の線を守っていたのです。東京駅からだと幕張くらいでしょうか、普通なら七、八万人で守る広い戦線です。この日本軍の一番薄い所を衝いて、グリッペンベルグ大將率いる十万の大軍が襲いかかってきたのです。

好古は斥候の報告で騎兵の大軍団が南下していること、本格的攻勢が近いことを満州軍総司令部に報告していました。ヨーロッパの在外公館からも、ロシア軍の新たな攻勢の情報が大本営に入り、警戒警報は出ていたのです。ところが零下二十度、ちよつと風が吹くと三十度以下に下がる、物みな凍る厳寒、積雪の時期です。「こんな時に大軍を動かせるはずがない。せいぜい威力偵察だろう」。満州軍総司令部のこの単純な思い込みが、作戦を後手後手に回らせ、あわや日本軍崩壊のピンチを招くことになりました。寒い時に動けないと云うのは日本軍の常

識であつて、ロシアがナポレオンを破つたのは、真冬であつたことを忘れていたのです。

とにかく秋山支隊の防衛線が破られたら、後ろに回られて日本軍は包囲されます。好古としては理屈抜きで、八千人で死守するしかありません。頼みとするのは、工兵に作らせた四つの拠点陣地と十一丁の機関銃でした。遅まきながら満州軍総司令部も、弘前の第八師団を救援に向わせたのですが、この参謀長がとんでもないポカを冒します。秋山支隊の一番左の陣地は黒溝台でしたが、敵が左に回りたがっているから、いったん黒溝台の守備隊に退却させ、敵が通過した後で再び黒溝台に進出した方が、救援しやすいと云うのです。ところがロシア軍は通り過ぎるどころか、占領した黒溝台にそのまま居座り、大規模な陣地構築にとりかかったのです。自分から捨てた黒溝台を取り戻すのに、さらに二個師団の増援が必要になつただけではなく、黒溝台の隣、沈旦堡の陣地にロシア軍の猛攻が加わりました。

沈旦堡を守るのは豊辺新作大佐。新潟県出身で、ふだんは地味で目立たず、愚鈍という評価さえある連隊長だつたそうです。でも好古は、この人のどんな困難にも耐えようとする、沈着で粘り強い性格を買っていました。好古という人は、どんな場合でも常に最前線で指揮をとつた人ですが、戦場の匂いを嗅ぎ分けることにも巧みな指揮官でした。自分が守る陣地には寄せ集め部隊を置いて、手塩にかけて育ててきた子飼いの精鋭、第一騎兵旅団の主力は沈旦堡の豊辺大佐に預けていたのです。雨あられのような砲撃の後、大津波のようにロシア軍が押し寄せてきます。好古は何度か沈旦堡が消えてしまつたのではないか、豊辺の部隊は全滅したのではないかと思つたそうです。ところがその都度、三丁の機関銃音が聞こえてきて、豊辺が頑張っていることを教えてくれました。

実は沈旦堡包囲のロシア軍も、疲労の限界に達していたのです。寒さの中で立つたまま眠り出す兵士が増え、凍え死ぬ恐れが出てきました。ロシア軍指揮官は「部下を凍死させるわけにはいかない」と、ついに退却命令を出したのです。四日間にあつた黒溝台の戦いは、日本軍九千、ロシア軍一万七百の死傷者を出して終わりましたが、秋山支隊が沈旦堡を持ちこたえなければ、日本軍は総崩れとなり、次にくる奉天の戦いの勝利もなかつたわけです。そして耐えて耐えて、十倍を超す敵から守り抜くことが出来たのは、好古が騎兵に持たせた機関銃であり砲兵や工兵も動員しての総合力だったので。

私が子供のころ、山中峯太郎の軍事冒険小説「敵中横断三百里」をわくわくする思いで読んだものでした。秋山支隊の建川美次中尉以下六人の挺身隊が、撫順から鉄嶺にかけての千二百^キを踏破し、ロシア軍が奉天で決戦準備を進めていることを探ってきた話です。建川中尉は後に陸軍中将となり、昭和十六年に日ソ中立条約を結んだ時のソ連大使です。実はこの時期、黒溝台の戦いが始まる直前で

すが、秋山好古はこうした騎兵本来の機動力を生かした作戦を、満州の奥深く展開していたのです。その一つが、騎兵第八連隊長永沼秀文中佐の率いる騎兵二個中隊百七十六人、蒙古人の馬賊を合わせ約四百人の永沼挺進隊です。狙いはロシア軍の後方攪乱でした。行程二千キロ、二か月半という厳寒期の長期作戦ですが、長春付近でロシア軍の輸送の要である東清鉄道の新開河鉄橋を爆破し、追撃してきたコサツク騎兵を撃退しました。ロシア軍は神出鬼没の永沼挺進隊に振り回され、報告も次第に誇張されて、日本兵一万、馬賊五千の大軍が、ロシア軍の後方に潜入したことになったのです。

この情報に敏感に反応したのが、ロシア軍総司令官のクロパトキンでした。後ろから攻められては大変だということで、ミンチエンコ騎兵団を中心に三万の部隊と三十六門の大砲を主戦場の奉天から引き抜いて、北方にいると思ひ込んだ幻の日本軍に向かわせたのです。つまり奉天の戦いでは、この精鋭部隊が何の役にも立たず、日本軍勝利の一因となりました。クロパトキンは陸軍大臣も務めた秀才の戦術家ですが、実戦の指揮官としては神経が細すぎたようです。作戦計画は完璧といえるほど、スキのないものを練り上げます。その通りやっていたら、奉天の戦いも負けるはずがなかったのに、日本軍が一つ動く、次から次と心配になって、部隊をあつちこつち動かしてしまつたのです。秀才であつたがために、日本軍の次の手を読みすぎて、守りを固めるうちに大攻勢のチャンスを逃し、ついには鉄嶺へ向けての総退却となりました。

永沼挺進隊の活躍には後日談があります。新開河の鉄橋爆破で二人の戦死者を出しましたが、ロシア軍は墓地を作り丁重に弔つたのです。墓標は高さ三桁六十センチもある立派なもので、ロシア語で「日本の二人の勇士ここに眠る」と書かれていました。コサツクの司令官ミシチエンコ中将が「墓標を高くせよ」と命令したといわれますが、ロシア側にも騎士道精神が色濃く匂つていた時代でした。ポーツマス講和会議の交渉で、東清鉄道、後の満鉄をどこまで日本側の権利とするかが議題になった時、この墓標がここまで日本軍が来て戦闘をした、つまり戦勝国の占領地という証拠になって、長春から南が日本のものになったのです。

永沼中佐は色白で温厚な、好古にいわせると、一見商店の大旦那のような紳士だつたそうです。挺進隊のことを聞かれても、「私は秋山將軍の教え子で、教わつた通りのことをやつたまでです」。こう語るだけでしたが、その指揮統率ぶりには好古の考え方、生き方がハッキリ出ています。永沼挺進隊については、陸上自衛隊の東北方面総監をされた島貫重節さんという方が詳しく調べ、二十五年ほど前に「あゝ永沼挺進隊」という本を出しています。その中に佐藤勘三郎一等卒、一等兵のことですが、作戦中に味方とはぐれ、十三日間も満州の荒野を放浪したあげく、やつとの思いで帰ってきた兵隊のことが出てきます。

島貫さんは、当時九十二歳、山形で健在の佐藤一等卒に会って話を聞いていま

す。佐藤がある農家で休ませてもらっている、どうも様子がおかしい。便所に行く振りをして裏へ出ると、人を呼び集めています。戻れば捕まるので、馬も銃もそのまま捨てて逃げ出し、途中畑で働いていた農夫に、軍服と満州服を交換して貰いました。こうしてやつとの思いで帰ってきた佐藤に、「命ほしさに軍人の魂を捨ててきた」と、白い目で見る空気が強かったと云います。ところが永沼中佐は、詳しく話を聞いた上で、「お前が帰ってこれたのは、馬も銃も捨ててきたからだ。その行動は正しいが、当時の状況を知らない者にはわからないだろう。誤解を受けるといけないから、他の者には話さないように」。こうクギをさした上で、佐藤一等卒を連隊長付の従卒、つまり自分のそばに置いて、仲間の白い目から引き離れたと云うのです。

軍規に正せば、あるいは処罰の対象となる行為だったでしょう。でもそんな規定とか形式よりも、まず奮戦した部下が無事に帰ってきたことを喜び、しかも爪弾きされないように明快な処置を取っています。指揮官として、見事なばかりの愛のある統率です。日露戦争当時にはこんな軍人がいたのかと、びっくりする思いますが、人命よりも鉄砲とか規定とかの方が大事になっていくのは、この日露戦争に勝利して、精神主義、形式主義が強くなつてからのことなのです。

永沼挺進隊は死者二十三名、行方不明二名、負傷者六十名を出しましたが、奉天の戦いの殊勲第一ということで、大山巖総司令官から部隊感状を受けました。感状というのは戦場における名誉を顕彰し、軍司令官がそれを全軍に布告する表彰制度です。すごいと思うのは、永沼中佐が個人感状の候補者として推薦したのは、たった一人。それも将校でも下士官でもなく、位では一番下ともいえる佐藤弥作一等卒一人です。挺進隊の長期作戦は大勢の負傷者を抱え、寒さと食糧難に耐える、忍耐のみの行軍だったと云います。そんな中で佐藤弥作一等卒は、自分の食事もとらずに重傷者に与え、負傷した時に備えて誰もが隠し持っていた包帯を、負傷者のために差し出した。佐藤弥作一等卒は「己れの心との戦いに勝った、真の勇者だ」というのです。軍司令官からは殊勲第一の部隊なのだから、もっと申請しろと云ってきましたが、永沼中佐は「功無きをいかんせん」と返電させたそうです。軍人が血気にはやり、功名を求めるのは戦場の宿命ですが、「勝ち戦に驕り、功名を追えば国は敗れる」というのが好古の持論でした。この論功行賞をみても、永沼中佐が「上に薄く、下に厚く」を実践し、自らも好古の教えを守って、謙虚に身を慎む気持ちが強かったことがわかります。

好古もまた生涯名利を求めず、無欲恬淡な人でした。明治三十三年の義和団事件の後始末で、清国駐屯軍司令官をしていた時の話です。習志野の騎兵第一旅団長に転勤が決まり、天津で送別会が開かれました。居留民が感謝の寄金を募ると七百ドル集まり、後日金時計を買って贈ることになりました。すると好古は感謝の言葉を述べた上で、「これから赴任する習志野は狐、狸が住む野っ原です。そん

な高価な物は似合いません。それより折角のご好意、現金で頂けないか」と云うのです。みんなげんげんな面持ちですが、本人の希望ですからその通りにすると、好古は再び起つて、「この七百^{ドル}を日本の居留民学校の教育資金にしていたら良かった」。万雷の拍手に包まれたと云います。家に持つて帰るのはいつも目録だけ、中身はみんな部下や他人にやつてしまふのです。習志野時代は薬田台の駅から百^{ヤード}ほど入った、宍倉というお醤油の醸造屋さんの家を借りていたそうです。陸軍大將になつても、東京千駄ヶ谷で借家住まいでした。

軍人一筋の好古でしたが、心の優しい人でした。幼名信三郎を好古としたのは漢学好きの父親が、「信じて古を好む」という論語からつけたのだそうですが、そのお父さんがフランス留学中に亡くなりました。弟の真之も兵学校を出て遠洋航海の最中です。自分たちがいない時に父が死んだ。この悲しみを表わすため、フランスの新聞にお父さんの大きな死亡広告を出したと云うのです。筆無精の好古としては珍しく長い手紙を真之に出し、「東洋の一孤島にある親父の名を、欧州人に知らしめたるは不幸中の一奇話に候」と書いています。お母さんが亡くなつたのも日露戦争の最中、二人とも戦地にいる時でした。日本海海戦の直後で、好古は松山の知人に、「おふくろは真之が働いたから、日本海海戦大勝利の号外を持つて親父のもとに行つただろう」と云う手紙を送っています。

好古は日露戦争が終わつて凱旋する時、第一騎兵旅団凱旋歌と称する、ざれ歌を作っています。「自労自活は天の道、卑しむべきは無為徒食、一夫一婦は人道ぞ」。故郷に帰る兵士たちに、これからの生き方をわかりやすく七五調で諭したのですが、「日が暮れたなら天を見よ 常に動かぬ北斗星」と云うのがいいですね。天道、人道は好古の一生を貫いた人生訓でもありました。好古自身、大正十二年に退官すると、請われるままに死ぬ直前まで六年間、郷里松山の私立中学の校長を務めています。従二位勲一等功二級金鷄勲章、陸軍大將まで登りつめた人が、田舎の校長さんをやるなんてことは当時としては考えられないことでした。精励恪勤、松山の人は乗馬姿の好古の出勤で、時計を合わせたという話が残っています。

「日本の非力な騎兵が、コサツクに勝てたのはなぜか」。こう聞かれた秋山好古は、「日本の騎兵が最初から機関銃を持っていたのに、向こうが持つていなかったからだ」と、極めて明快に答えています。そして「精神力を強調する余り、火力、つまり大砲なり機関銃の力を無視する傾向はどうにも解せない」と嘆いていたそうです。日露戦争後の日本は、精神力と大和魂の国になっていきました。明治四十二年に制定された「歩兵操典」、これは歩兵の戦い方を決めた教科書ともいふべきものですが、「戦闘の最後を決めるのは銃剣突撃である」と書いています。旅順の戦いで、乃木希典大將の第三軍が六万余りの多大な死傷者を出したのは、大砲と機関銃に守られた砲台に、無謀な銃剣突撃を繰り返したためでした。

し、秋山騎兵団がコサツクの突撃を撃退できたのは機関銃のお陰でした。ところがその尊い教訓は、一見威勢のいい銃剣突撃に無視されてしまったのです。

第一次世界大戦で観戦武官として、ヨーロッパ戦線をその目で見た小林順一郎という砲兵大佐は、「日本の編成装備では列強との戦鬪に勝てない。現代戦に応じた装備にすべきだ」。こういう意見書を出して、陸軍を追われました。必勝の信念こそ勝利の根本なのに、武器のことをいうのは敗戦主義だということです。それ以来日本陸軍では、武器、兵器について自由闊達な論議をする空気がなくなっていました。明治維新を生き抜いてきた人たちは、外国の侵略から日本を守るには、刀では駄目なことを知っていました。明治維新は薩長という勝者、徳川という敗者を生みましたが、勝った薩長も馬関戦争、薩英戦争と外国との戦いでは負けているのです。こつちがタドンのような丸い弾丸なのに、向こうのアームストロング砲は、砲弾の先が椎の実のように尖っていて、スピードも速く威力も凄まじいのにびつくりしたと云います。明治の人は新知識、新技術に敏感であり、その導入にも積極的でした。フランスに留学した秋山好古は、いち早くフランス陸軍の機関銃に注目しています。それなのに日露戦争を境にして、「銃より刀」の時代に逆戻りしてしまいました。戦車、飛行機、自動小銃と、どんどん武器が近代化していったのに、時代の進歩についていけなかったのは、何とも残念なことでした。

ポーツマスで講和交渉が進んでいるころ、騎兵第二旅団も秋山好古の指揮下に入り、「秋山騎兵団」として文字通りの大騎兵集団になりました。「このままだと、せつかくの大騎兵団の力を一度も試さないうちに、戦争が終わってしまう。今後の騎兵運用の参考にするためにも、ロシア軍陣地を攻撃してみないか」。上級司令部の参謀が、こんな悪魔の誘惑のような話をけしかけてきました。もう講和条約の成立が確定的になつていゝ時です。好古は「貴重な騎兵を単なる研究の犠牲にするなど、断じて同意出来ない。武を汚すものだ」と、断固としてはねつけたと云います。

好古は戦後、「強大なロシアに勝てたのは何故か」と聞かれて、「ロシア陸軍が国民の軍隊でなかったからだ」と答えています。つまりロシア皇帝の軍隊であつて、極東征服という皇帝の野心のために動いた軍隊だと云うのです。好古は福沢諭吉を尊敬し、二人の男の子を軍人にしないで慶応義塾に入れたほど、福沢の平等思想が好きだつたそうです。日本の軍隊は、明治維新で生まれた四民平等の国家を守るための軍隊であつて、「天皇の軍隊」という認識は好古にはなかつたようです。日本軍は国民の軍隊だつたから、日露戦争という国家の危機にみんなが銃をとつて戦つたと云うのです。ところが昭和に入つてからの日本陸軍は「天皇の軍隊」という名のもとに、勝手気儘な行動を起こします。関東軍の参謀が満鉄爆破という謀略で満州事変を起こしましたし、現地紛争に過ぎなかつた盧溝橋

事件、ノモンハン事件を拡大して太平洋戦争への道を開きます。いずれも参謀たちの野心、功名心が軍隊を動かした結果です。軍の上層部に、参謀の越権行為を厳しくたしなめる、好古のような見識があったら、日本の進路ももう少し変わったものになっていたのではないのでしょうか。

こうした野心、功名心の種は、実は日露戦争で播かれたものなのです。この戦争の功績で爵位を授けられた軍人は、陸軍六十四人、海軍三十五人、合わせて九十九人にもなっています。しかも長州二十一人、薩摩二十六人と薩長が半数近くを占めました。旅順攻略で多くの死傷者を出したのは、薩摩出身の第三軍参謀長の伊地知幸介少将の頑固で、無能な作戦にあったと云うのが、陸軍部内の定評でした。ところが長州出身の乃木を伯爵にするには、参謀長に傷をつけてはならない、手柄があつたことにしないとイケなかつたのです。伊地知は戦争が終わつたとき中将になつていましたから、中将以上という爵位の規定に従つて男爵になりました。まさに「一将功成り万骨枯る」です。あれほど乃木の第三軍を苦しめたステツセルが、戦後軍法会議にかけられ、その後禁固十年に減刑になつたとはいえ、一度は死刑の判決を受けたことを考えると、信賞必罰と云いながら、日本には罰はなかつたようです。金鷄勲章にしても位の昇進にしても、大正、昭和と後になればなるほど乱発の傾向が強くなつていきました。そして戦争でないと手に入らない爵位、金鷄勲章を求めて、平地に乱を起す軍人たちが増えていったのではないのでしょうか。

昭和五年に秋山好古が亡くなった時、新聞は「最後の武士が死んだ」と書きました。爵位はなく、軍人としての最高の榮譽である元帥にもなつていません。その時の陸軍大臣は、元帥に推薦する予定だったが、好古が辞退したといっています。「戦勝に驕り、功名を追えば国は敗れる」といったのは秋山好古ですが、残念ながら日本はその通りの道をたどることになります。